



卷頭言

梅屋, 潔

(Citation)

神戸文化人類学研究, 2022 特別号:1-3

(Issue Date)

2022-07-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013470>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013470>



巻頭言 窪田さんのこと

唐突に私事から書き起こすことをご寛恕願いたい。

窪田幸子教授に初めて出会ったのは、2000年のことである。場所は京都。京都大学人文研の共同研究会の席上である。まだ窪田さんは広島大学にいた。何か先輩研究者（具体的には田中雅一氏）に対する私の態度が僭越だと、注意（説教？）されたのを記憶している。その時には、9年後に同僚になり、その20数年後にこういった雑文を草する関係になるなどは、思ってもみなかった。たぶん窪田さんもそうだろう。

神戸大学に赴任した時期は全く同じである。当時すでにオセアニア研究で有名だった窪田さんと無名の私とは、立場も違った。それでも、ともに、2009年の10月に着任して以来、12年間の窪田さんの神戸大学教授としての時間、私も同僚として同じ職場で角度は違えど同じ景色を見ていたことになる。

着任してほどなく、窪田さんの研究者としての名声はピークを迎える。神戸大学在籍中の窪田さんは、その12年間の間に、日本学術会議会員、IUAES副会長、日本文化人類学会会長など、日本人の人類学者としてあらゆる要職を歴任した。その時の肩書は、ずっと「神戸大学教授」であったから、控えめに言っても、人類学や学術の世界では、国内外で「神戸大学」の名前を有名にしたことに一役買っていることはまちがいない。と、ここまでは誰でも知っていることである。

その活躍と表裏一体の帰結として、窪田さんは、他の方には到底まねできない、いわばパイオニアワークの足跡をいくつもこの職場に残してきた。それは我々しか知らないことから、ここで書く意味があるだろう。

今でも記憶に残るのは、通常ではありえないはずの日程での海外出張の審議が教授会でなされ、教授会が一時、大紛糾したことである（学会での用事だったと記憶する）。あるいは、これも通常ありうべからざることだと私のような凡庸な教授は考えるのだが、教授会を数年間、まるまる欠席したこともある。これ以外にもたくさんあるが、神戸大学大学院国際文化学研究科、という職場に、窪田さんが残したユニークな事績は、数知れない。

念のために注記するが、教授会の欠席は、第3金曜日という定例の教授会の日時が日本学術会議の定例会議の日程とバッティングしたためである。通常この種の会員に推挙されて断ることはあまり考えられず（研究科としても、大学としても名誉なことなのだろうと思う、たぶん）、会員である以上、会議にでないわけにはいかない（この会については昨今マスコミなどで信じられないほどいい加減な情報が流布しているが、批判するのは構わないが、もっとベーシックな情報をきちんと調べてほしいものだと思う）。確認したわけではないが、研究科長の特別許可というものが出ているのだろうと推察する。細かいことだが、図書委員会の位置づけについても窪田以前、窪田以後では、重要な変更が行われている（窪田さんは一時、図書委員会委員長だった）。

一般的に、秩序および規則、規範は、より根幹にかかわるものほど無意識化され、「ブックボックス化」されるので、言語化されにくく、その侵犯者、違反事例とセットでなければ具体的な白黒の境界や運用の幅はよく理解されえない。そういった意味では窪田さんは、教授会のフロアからときに批判交じりのため息を、ときに賞賛の拍手をひそやかに浴びながら、それぞれのルールと例外と違反の境界について、スリリングに、軽やかに、きわめてチャレンジングな事例を提供してくれた、とあってよい。組織人の悪弊としてありがちな硬直や思考停止とはまったく無縁である。その意味では、規則の例外状況を含め、さまざまな前例を、窪田さんは作ってきた、ということなのである。

後進がそのためにやりやすくなる、あるいは規則の仕様や運用のやり方が明確になった面もある。事柄によっては、私たちが反面教師にした部分もあるにちがいないが、それはパイオニアワークの宿命だろう。

この特集号は、神戸大学大学院国際文化学研究科にそんなパイオニアワークを残した、窪田幸子教授を記念する号として編集された。編集に関わっているのも、窪田さんの息のかかった、一癖もふたくせもありそうな若手研究者たちであると承知している。そのほとんどは、神戸大学に在籍しているので、窪田さんは、ある意味では、多くのネットワークと影響力をまだ本学に残しているのである。その意味では、退職した後も、窪田さんの影響力は、本学に影にひなたに、続くのだらうと予想している。

私が同僚になる前からはからずして知己を得ていた事実からもわかるように、研究者同士の関係というのは、同僚でなくなったからといって、突然切れてゼロになるようなものでもない。

この度、窪田さんが、神戸大学を離れ、芦屋大学学長となったあとも、あちこちにいろいろなネットワークを残しており、まだまだ縁が切れるとは到底思えない。何より名誉教授でもあるから、あらわれたら歓迎するしかないところもある。まったく油断がならないのである。

窪田さんは、有言実行の人でもあるし、芦屋大学学長としても、さまざまなパイオニアワークを必ずや実現されるのだらうと確信している。上の事跡などからわかるように、ある意味で「天然」なのである。やろうとしてできるものではない。

私のような凡庸なものは、学長などという役職は、管理職で、経営陣なのだから、研究や教育などをあきらめ、それらからある種身を引いた存在のように硬直的に考えてしまうが、窪田さんは違う。学長に就任する条件として、最初に、研究を継続するべく研究室を確保する交渉をしたのだという。私のようなものの到底及ばぬ発想である。

しかも、である。どうもその研究室には、あちらこちらから集まった「草の者」が時折集まっているような気配である。実態は秘密のヴェールに包まれているが、神戸大学に籍を置いているもの、籍を置いていたものも何人かはいそうである。魔女たちのカヴンよろしく、そこで、おそらくは時には血のような赤いワインが供されて、何事かのたくらみが行われているのではないかと私は怪しむ。

しかも、六麓荘には私のような不逞の輩は立ち入る隙はない。立ち入るには、パスポートが要る、というではないか。

それは都市伝説だとしても、凡庸な私としては、今後六麓荘方面からの影響から逃れ、負の影響になりそうなところは注意深く正に変換するようにして、適度にやり過ぎることができるかを当面の課題としようと思う。と、いうわけで私にできることがあったら何でもお言いつけください、できることしかできないので、と、おそろおそろ申し上げておこう。ついでにまた神戸大学をよろしくお見捨てなきようにと付け加えておこう。そのような袖すりあう縁、人間のネットワーク、そんなものが人間を助けてくれる大きな力だ、ということ私たちが学ぶ人文科学の知性は示してくれているようにも思う。

窪田幸子教授のますますの御活躍をお祈りする次第である。それが、いつか、どこかで、わたしたちにもコンヴィヴィアルな共益をもたらしてくれるはずでもある。たとえそれに明示的に気が付くことがあっても、なくても。

10年ほど前に酒をやめた私が六麓荘のカヴンのワインを口にできないのは、ちょっとだけ、残念なことである。

梅屋潔